

國學院大學學術情報リポジトリ

敏達紀の「弥勒石像」と朝鮮三国の弥勒信仰：
特集『日本書紀』研究の現在と未来

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山崎, 雅稔, Yamasaki, Masatoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000605

敏達紀の「弥勒石像」と朝鮮三国の弥勒信仰

山崎雅稔

はじめに

古代日本の仏教は、欽明天皇十三年（五五二）の伝来を記した『日本書紀』、同天皇の在位中の戊午年（五三八）の伝来を記した『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』（以下『元興寺縁起』と略称する）・『上宮聖徳法王帝説』の二系統の初伝史料が存在し、およそ六世紀前半から中葉にかけて、百済との王権間の交流を通じてその受容がはじまったことが知られる。倭と朝鮮諸国との対外交渉は、高句麗の南進政策を背景とする軍事的緊張

にともなうものであり、倭王権の軍事・外交に関与した諸豪族、倭に移り住んだ渡来人のなかには、早くから仏の教えに接し、信仰を受け入れた者がいたことも確かであろうし、¹⁾他方で、六世紀末以降の対隋・対唐外交によって中国の仏教文化を摂取しはじめた段階においても、朝鮮三国で発展した仏教の影響が十分に認められるところである。

六・七世紀を中心に古代日本及び朝鮮諸国で流行した信仰の一つに弥勒菩薩に対する信仰がある。本論は、その信仰のありようを文献・金石文資料を通して把握しようとするものである。弥勒信仰に関連して、早くから注目されてきたのは半跏思惟

像の造像である。右足を組んで左足を踏み下げ、右手指先を頬にあてて思惟するその像容は、広隆寺や中宮寺などの諸寺に伝存し、『広隆寺縁起資財帳』や野中寺（大阪府）で発見された半跏思惟形の尊像の台座に「弥勒」と刻されることから弥勒菩薩とみるのが一般的であった。しかし、インドや中国においては、弥勒の尊名をもつ菩薩を半跏思惟の姿で造形する明確な例がなく、美術史研究の視座から疑義も提示されている²⁾。

飛鳥・奈良時代の弥勒信仰に関する史資料は少なからず存在するが、養老四年（七二〇）に完成した『日本書紀』は仏教の受容・興隆を伝える貴重な史料にして、弥勒信仰の盛行とほぼ同時期の編纂物であるにもかかわらず、わずかに敏達天皇十三年（五八四）九月条に初見する「弥勒石像」について記すにとどまる³⁾。

この石像は、百濟から将来されたもので、蘇我馬子が所有したとされる。その像容や関連記事については藤沢一夫氏や日野昭氏をはじめとする先学の研究があるものの、弥勒石像と朝鮮諸国で展開した弥勒信仰がどのように接続するのかという問題に関しては、高句麗・百濟・新羅の事例を検討しつつ、掘り下げてみる必要がある。

一、敏達紀の弥勒石像

(一) 弥勒信仰

はじめに、弥勒信仰について簡単に整理しておきたい⁵⁾。弥勒は釈迦とともに修行した人物とされ、その死後、兜率天において修行する身でありながら、現在仏である釈迦について仏になることを約束された「一生補処」の菩薩にして未来仏である。釈迦入滅から五十六億七千万歳の時を経て、閻浮提、すなわち人間世界に下生して、龍華樹の下で有縁の人々に向かって三度の説法（龍華三会）を行い、釈迦の救済からもれた人々を救うとされている。

かかる弥勒に対する信仰は二つの形をもつ。一つは、未来世における龍華三会に値遇すること（三会値遇）を願う弥勒下生信仰であり、もう一つは、現世における往生に際して兜率天に昇り、弥勒の側で約束の時を待ち、弥勒とともに下生して三会に値遇することを願う弥勒上生信仰である。弥勒の下生によって閻浮提は弥勒仏の住まう浄土になるが、一方で未来仏のいる兜率天も浄土と観念された。以上のような信仰から、弥勒は図像としては仏になる前の姿（菩薩形）と悟りを得た後の姿（如

来形)の両方で表現される。

インドにはじまり、西域を経て中国で盛行した弥勒に対する信仰を支えた經典は数多存在するが、なかでも、『仏説観弥勒菩薩上生兜率天経』(北凉・沮渠京声訳)、『仏説弥勒下生成仏経』(後漢・鳩摩羅什訳)、『仏説弥勒大成仏経』(同上)の三部が重要な經典である。インドでは後二者にみえる三会値遇の思想、下生信仰がまず成立し、上生信仰はのちに成立したと考えられている。

古代日本の弥勒信仰について、速水侑氏によれば、中国・朝鮮諸国に遅れて仏教を受け入れた日本には下生・上生といった二つの信仰が時を同じくして伝来し、むしろ上生信仰が弥勒信仰の主流をなした。その全体的な傾向としては、現世利益を求める信仰、追善的性格をもつ上生信仰、および個人の救済を求める上生信仰が重視されており、儒教思想を基調とする「戒律為本」の理念との接合がみられるという。

(二) 敏達紀の仏教関係記事

敏達天皇十三年・十四年にかかる『日本書紀』の仏教関係記事は、「仏法の初、茲より作れり」(同十三年是歳条)とあるように、仏教の初伝とは異なる新たな信仰のはじまりを敏達天皇

の時代の終わりに設定する意図をもつて叙述されたものである。そのため、記事の内容は編纂段階における作為性や史実としての虚構性を免れない⁷⁾。史料の扱いに慎重を要するが、弥勒石像にまつわる記述には何らかの事実も反映されていると考えられる。以下、記事の内容を整理しつつ、この点を確認することにした。

まず、『日本書紀』敏達天皇十三年九月条には、

秋九月、從百濟來鹿深臣(闕名字)、有弥勒石像一軀。
佐伯連(闕名字)、有仏像一軀。

とあつて、百濟より帰還した鹿深臣が弥勒石像一軀を将来したこと、佐伯連が仏像一軀を将来したことがみえる。そして、続く是歳条には、蘇我馬子がこれらの仏像を請い受けたことが叙述される。

是歳、蘇我馬子宿禰、請其仏像二軀、乃遣鞍部村主司馬達等・池辺直氷田、使於四方、訪覓修行者。於是唯於播磨國、得僧還俗者。名高麗惠便。大臣乃以為師。令度司馬達等女嶋。曰善信尼(年十一歳)。又度善信尼弟子二人。其一、漢人夜菩之女豊女、名曰禪藏尼。其二、錦織壺之女石女、名曰惠善尼(壺、此云都符)。馬子独依仏法、崇敬三尼。乃以三尼付氷田直与

達等、令_レ供_二衣食_一。經_二當_レ仏殿於宅東方_一、安_二置_レ弥勒石像_一。屈_二請_三三尼_一大会設齋。此時、達等得_レ仏舍利於齋食上_一。即以_二舍利_一獻_二於馬子宿禰_一。馬子宿禰試以_二舍利_一置_二鉄質中_一、振_レ鉄鎚打_レ。其實与_レ鎚、悉被_レ摧壞_一。而舍利不_レ可_レ摧毀_一。又投_二舍利於水_一、舍利随_二心所_レ願、浮_二沈於水_一。由_レ是、馬子宿禰・池辺水田・司馬達等、深信_二仏法_一、修行不_レ懈。馬子宿禰、亦於_二石川宅_一、修_二治

れたのである。
敏達天皇十四年にかかる記事は、右の是歳条をうけて展開する。二月壬寅条は、蘇我馬子が大野丘の北に塔を建立し、司馬達等が献上した舍利をその心柱に納めたこと、同月辛亥条は、馬子は病を患い、その理由を卜筮に問い、天皇の詔を得て仏を祀ったこと、「石像」に礼して「延寿」を願ったこと、しかし国内では疫病が流行したことを伝える。記事には、

仏殿_一。仏法之初、自_レ茲而作。
仏像を入手した蘇我馬子は、鞍部村主司馬達等・池辺直永田に命じて修行者を探し、播磨国で見つけた還俗者で高句麗人の恵便を師とした。そして、司馬達等の娘の嶋(善信尼)、漢人夜菩の娘豊女、錦織壺の娘石女の三人を得度して尼とした。馬子は三尼を崇敬し、三尼を池辺直永田と司馬達等に託して衣食

蘇我大臣患疾。問_二於卜者_一、卜者对言、崇_レ於_二父時_一所祭
仏神之心也。大臣即遣_二子弟_一奏_二其占状_一。詔曰、宜_レ依_二
卜者之言_一、祭_中祠_上父神_上。大臣奉_レ詔、礼_二拜_レ石像_一、乞_レ
延_二寿命_一。是時、国行_二疫疾_一、民死者衆。
とある。ここにみえる「石像」は弥勒石像のことである。
さらに、三月丁巳条は、物部守屋大連・中臣勝海大夫らが疫

を供養させ、自邸の東方に仏殿をつくり弥勒の石像を安置した。また、司馬達等が三尼を屈請して大会の設齋を営んだ際、舍利が出現したので馬子に献上した。舍利出現の神異に対し、馬子と司馬達等・池辺直永田の三人はさらに信仰を篤くし、馬子は石川宅に仏殿を建てたという。

病蔓延を馬子の信仰のせいであると奏請したことにより、仏法を禁止する詔が下されたこと、同月丙戌条は、物部守屋が寺塔を倒して火を放ち、仏像・仏殿を焼き、善信尼らを捕らえて三衣を奪い、海石榴市で鞭打ちにした破仏事件と、敏達天皇と守屋が疫病に罹患したことを叙述する。そして六月条は、信仰を許された馬子が三尼を石川精舎に迎えて供養したとする。

鹿深臣・佐伯連が将来した仏像を我が物とした蘇我馬子は、僧侶と出家者(三人の尼)を得て仏殿を建て、舍利をも手に入

全体としては、仏像・僧尼・仏殿・舍利の獲得と造塔といっ

た蘇我馬子個人の信仰が具体化していく様を記し、敏達天皇や物部守屋らによる破仏という受難を経て信仰がさらに深まったことが叙述される。『日本書紀』崇峻天皇元年是歲（五八八）条によれば、この年百濟は倭に僧侶や寺工を遣使するとともに「仏舍利」を献じている。舍利の獲得と造塔記事の背景には、舍利信仰の受容という事実があった。しかし、舍利を鉄槌で叩いても砕けず、かえて槌と金床（質）が砕けたという靈驗譚は、梁の慧皎撰『高僧伝』卷一・康僧会伝の吳王孫権の建初寺創建にまつわる同様の逸話や、数々の舍利の奇瑞を集める『集神州三宝感通録』卷上の説話に基づくことが明らかにされている⁽⁸⁾。破仏事件に関しても『高僧伝』にみえる呉の第四代皇帝孫皓（末帝）の政策との類似性が看取されるのであり、これらを直ちに史実とみなすことはできない。

右の経緯については、『元興寺縁起』にも記述がある。馬古足禰（蘇我馬子）が癸卯の年（五八三）の国内の災いに際して、卜筮により弘法を決意し、惠弁と比丘尼の法明を請い、三尼を出家させて桜井道場に住まわせ、甲賀臣が百濟より将来した「石弥勒菩薩」を道場に安置して、三尼に供養・礼拝させたこと、ときに食事の折に按師首が舍利を得て馬古に献じたので、乙巳の年（五八四）二月に止由良佐岐に刹を立て舍利を納めたが、

大会に際して他田天皇（敏達天皇）が刹柱を伐り、仏像・殿を焼き、三尼の法衣を脱がして、仏法を破滅させようとしたこと、そして、そのために国内に悪瘡が流行したことを伝える。破仏の主体を敏達天皇に求め、推古天皇が積極的に信仰を保護したことに関説し、前後関係や内容を若干異にする。本論に関わる弥勒石像に関しては、

甲賀臣、從百濟持一度石弥勒菩薩像。三柱尼等、持家口「供養礼拝。

とある。石像が菩薩形であったとする点は注目される。甲賀臣は鹿深臣のことであり、三尼が供養・礼拝したというのは『日本書紀』に同じである。

(三) 弥勒石像

以上に整理した『日本書紀』の記事より、弥勒石像の将来・信仰に関しておよそ次の点を確認できよう。第一に、百濟からもたらされたことである。第二に、それは蘇我馬子の所有物となり、仏殿に安置され、時に馬子が長命を願って礼拝したことである。これらの点は比較的史実としての蓋然性が高いと思う。ここではこれらの点を検討してみたい。

まず、第一の点について考える。弥勒石像を将来した鹿深臣

(甲賀臣)は、のちの近江国甲賀郡に盤踞した豪族であり、天平二十年(七四八)二月に、東大寺盧舎那仏に知識物を進めて叙位をうけた甲可臣真束は同族とみられる(『続日本紀』同月壬戌条)¹⁰⁾。日野昭氏は『坂上系図』に阿智王に随つて倭国に渡来した村主三十氏のなかに甲賀村主がみえることから、甲賀の地には倭漢氏系の渡来人の影響が及んでおり、そのことが石像将来に関連するとしている¹¹⁾。『日本書紀』には鹿深臣が対外交渉に関わった事実是他に見えない。しかし、鹿深臣が百済に渡り石像を入手したとあるので、次に挙げる佐伯連と同じように、六世紀後半の倭済関係を背景にして百済との接点を持っていたと考えるのが妥当であろう。

佐伯連は大伴氏の同族である。名を欠くが、欽明天皇十五年(五五四)正月丙申条、同十七年正月条にその動向が伝えられる。前者は、筑紫に到来した百済の使者が内臣・佐伯連に対して援軍派遣を催促する記事である。内臣の百済への派遣は欽明天皇十四年六月条にみえ、このとき佐伯連も渡海を命じられたのである。佐伯連らの援軍は、百済側の再要請まで筑紫にとどまっておらず、実際に百済に向かったのは十五年五月とみられる¹²⁾。百済の聖明王は、五五一年に高句麗の政治的混乱に乗じて、新羅の協力のもとに漢江下流域の旧領土を回復した。ところが、

五五三年に百済領となった同地域を新羅が奪取するという事態が発生する。そのため、聖明王は自ら軍を率いて新羅との対決に臨んだが、百済軍は管山城(忠清北道沃川)付近で新羅軍の急襲を受けて大敗し、王も戦死するという失態を招く¹³⁾。

後者は、聖明王の死を告げるために来倭した恵王(聖明王の子、威徳王の弟)の百済帰還に際して、阿倍臣・播磨臣とともに佐伯連が舟師を率いて恵王を護衛したことを伝えるのである。ここに仏教興隆を先導した百済王家との接点を見ることができ、六世紀後半の百済は、高句麗・新羅との軍事的衝突のなかで、倭に援軍を要請したのである。百済と倭は新羅による加耶侵攻という外交・軍事上の課題も抱えていた。そうしたなかで、百済は五五七年に経論・律師・禪師・比丘尼・呪禁師・造仏工・造寺工を倭に派遣するなど、仏教を通じて倭との関係強化に努めているのであって、百済に対する軍事支援に関与した佐伯連が同地で仏像を入手したとしても無理はない。

ただし、先に掲出した『元興寺縁起』の記事には、佐伯連による仏像の将来、馬子への譲渡に関する言及がない。『日本書紀』は何らかの典拠に基づいて蘇我馬子が弥勒石像とこの仏像を手に入れたことを併記したと思われるが、後続の記事も仏像がその後どうなったのか、まったく触れていない。

次に、第二の点について考える。断片的な史料であるが、病気の平癒や「延寿」を願ったという馬子の祈りには現世利益的な性格を見取ることができる。同様の弥勒への信仰は、野中寺の金銅造半跏思惟像の台座框の銘文にみえる。六十二字の銘文には、

丙寅年四月大田八日癸卯開記。栢寺智識之等、詣中宮天皇
 大御身勞坐之時、誓願之奉弥勒御像也。友等人數
 一百十八、是依六道四生人等、此教可相之也。

とある。丙寅年は天智天皇五年（六六六）にあたり、七世紀に造像された半跏思惟形の菩薩が「弥勒御像」として制作されたことが分かる作例として注目される。銘文によれば、本像は栢寺の知識等が「中宮天皇」の病氣平癒を祈願して造らせたものであり、馬子の信奉との共通点を有する。また、二つの史料においては、上生・下生の思想などは問題にされていない。

ところで、藤沢一夫氏の研究⁽¹⁸⁾によれば、『聖徳太子伝暦』をはじめとする平安時代中期以降の諸文献に弥勒石像に関する記録が散見する。内容の異同や誤りもあるが、蘇我馬子宅の東方の仏殿に安置されていた仏像は、本元興寺（飛鳥寺）、ついで新元興寺に移されたのち、鎌倉時代には多武峯の平等院に置かれていたらしい。これらの史料にはその由緒や像容を記すもの

がある。例えば、十五世紀半ばの康正・長祿年間に撰述された『南都七大巡礼記』には、

安「置味得石像一尺許」。日本国最初仏像也。（本元興寺北
 僧坊条）

当時元明天皇建立云々、自百済国渡馬瑙之弥勒像。則
 安「本元興寺金堂云々」。〔新元興寺条〕

とある。日本最初の仏像にして、百済より伝来した弥勒とされる石像が元興寺に伝わっていたのである。右の史料はその材質を「瑪瑙」としている。これに対して、『上宮太子拾遺記』第二は、

或人云、件石像、長一尺余（或八七寸）、坐像也。色白、
 極固、面貌奇麗耳。

とし、同書所引の『巡礼記』は、

北僧坊弥勒石像一尺許居。足下。是日本最初仏也。

と伝えている。藤沢氏は、坐像にして「足下ぐ」とあるのは半跏思惟像であるとし、「色白、極固」というのは見た目の質感であり、一尺ないし七・八寸の石像仏であることから、扶余や公州で発見された滑石製（蠟石製）の仏像に類する可能性を指摘している⁽¹⁹⁾。大西修也氏の研究によれば、百済の蠟石製仏像の造像は六世紀中頃から末頃にかけて盛行し、盛期の像容は六世

紀前半の中国の南北朝様式を主体とし、「長身かつ扁平な体軀」を持つなどの特徴を帯びた²⁰⁾。これらの史資料や研究成果により、ひとまず弥勒石像の容貌を憶測できよう。

それでは、敏達紀の弥勒石像は百済や高句麗・新羅の弥勒信仰とどのように接続するのだろうか。次章では各国の事例を整理しつつ検討することにした。

二、朝鮮三国の弥勒信仰

(一) 百済

百済の仏教受容は、六世紀前半の聖明王の時代に南朝の梁の通交を介して本格化する百済の旧領域であった朝鮮半島西部では、金銅像・銅像・石像・石碑像・磨崖像の各種の半跏思惟像が見つかっており、これらの造像活動が弥勒信仰との関わりから理解されている。しかし、『元興寺縁起』によれば、聖明王は「太子像」と釈迦の伝記「説仏起書卷一箇」を倭に伝えている。「太子像」は悉達太子、つまり釈迦が悟りを開く以前の姿であり、龍門石窟などの中国に半跏思惟形で表される例があることから、百済の半跏思惟像も悉達太子像であった可能性を否めない²¹⁾。

また、七世紀初頭の作例とされる泰安半島の瑞山磨崖仏は、中央に如来立像、正面から左方に捧宝珠菩薩立像、右方に菩薩半跏像を配した三尊仏であり、中央を釈迦、右方の半跏像を弥勒とみて、過去・現在・未来仏の表現とする理解もあるが、半跏像は本尊に対する脇侍であり、左方の菩薩立像と同格とみる説もある²²⁾。このように、銘文等のない半跏像の尊名の判断は難しい。

弥勒と目される半跏思惟像を描いた磨崖仏として、中原鳳凰里磨崖仏像群（忠清北道中原郡可金面）がある。この磨崖仏は、六世紀末から七世紀初頭にかけて、百済もしくは新羅の領域支配下で彫られた作例とされる。二つの壁面に描かれており、正面左方の壁面には如来坐像一軀と片膝をついて花香を捧げる人物一軀、右方の壁面には半跏思惟像が中心に据えられ、その右側に一軀の立像、左側に四軀の立像が描かれる。その画像解釈としては、半跏像は閻浮提に下生した弥勒菩薩、左右の立像（人物）は弥勒とともに兜率天から下生した在家信者ないし菩薩を表し、如来像は仏となった弥勒を表すとみる見解がある²³⁾。弥勒下生信仰の図像的表現とする理解がある一方で、キジル石窟の「弥勒菩薩兜率天説法図」と間に、構図上の共通点が認められることから、むしろ弥勒上生信仰を表現したものと見る見方が

提示されており、その解釈にはなお検討の余地がある。⁽²⁴⁾

一方、弥勒を半跏像として表現した例に、蓮華寺戊寅年銘仏碑像がある。蓮華寺は忠清南道燕岐郡西面月河里（現在の世宗市）に所在する一九一四年創建の寺であり、仏碑自体は近隣の生千寺址（同面双流里）で出土したと伝わる。「戊寅年」は新羅の文武王十八年（六七八）に比定され、厳密には百濟滅亡後の資料である。仏碑は、仏像を四面に彫刻し、台座を別造したもので、前面は中央に阿弥陀如来、その左右に羅漢像・菩薩像各二軀の五尊仏、背面は中央に半跏思惟像、左右に菩薩像各一軀の三尊仏を配置する。銘文は両側面に刻まれる。筆者は未調査だが、摩滅が激しく右側面の三行のみ判読可能とされる。

戊寅年七月七日

其家

□□□□一切衆生□造阿弥陀弥
□□□□

三行目の「阿弥陀」の次の一字については、「仏」と判読する見解もある。⁽²⁵⁾ いずれにしても、造像記は仏碑前面・背面の二軀の主尊による「其家」の住人や「一切衆生」の救済を祈願して造像したことを刻んだものとみられるから、阿弥陀の尊名とともに、兜率天から地上に下生して衆生を救うと約束された弥

勒の尊名が併記された可能性が高い。阿弥陀と弥勒の二仏を表したとすれば、背面の半跏思惟像が弥勒の姿を表している。

百濟における弥勒に対する国家的な信仰は、弥勒寺址（全羅北道益山市）と『三国遺事』巻第二・武王条の同寺創建説話に窺われる。後者は、武王が夫人とともに師子寺に行幸した際に龍華山麓の大池に弥勒三尊が出現したのを機縁として、武王が夫人（善花公主、新羅真平王の娘）の進言により大伽藍の創建を決意したこと、知命法師の神通力で池が平地になり、真平王が遣わした工人の力を借りて寺院を完成させ、弥勒の尊像三軀を安置し、その三方所に会殿・塔・廊閣を造営して、扁額を弥勒寺としたことを伝える。

弥勒寺は三院が並立する三塔三金堂式の伽藍配置をとることが明らかにされており、成道を遂げた弥勒が龍華樹の下で三度の説法を行うという『弥勒下生経』が記す預言に基づいて建てられた寺院であった。

二〇〇九年一月、弥勒寺西院石塔の解体補修工事中に舍利莊嚴具とともに見つかった舍利奉安記には、百濟王后であった佐平沙宅積徳の娘が浄罪を喜捨して伽藍を建て、己亥の年（六三九）の正月二十九日に舍利を迎え奉り、衆生が永らく舍利を供養するよう發願したと刻まれており、⁽²⁶⁾ 釈迦の舍利に対す

る信仰を伝える。この銘文には、

用此善根、仰資、大王陛下、年寿與山岳齊固(下略)

という言辞が連ねられている。「この善根によって大王陛下の寿命が山岳のように無窮になり……」⁽²⁸⁾という願主の願いが述べられているが、弥勒への信仰を背景に、舍利を得て塔を建立し、また長寿を祈願するという要素は、興味深いことに先にみた敏達紀にも認められる。

(二) 高句麗

高句麗の仏教は、四世紀後半の丸都に肖門寺・伊弗蘭寺を創建し、順道・阿道の二僧を住まわせたことにはじまり、広開土王の時代には平壤に九寺が建立されるなど隆盛を迎えたが、その影響は壁画古墳にも及んだ。⁽²⁹⁾

徳興里古墳(平安南道南浦市)は、前室北壁の天井に書かれた墨書銘(墓誌)により、永樂十八年(四〇八)末に完成し、棺を納めたことが知られる。被葬者は高句麗に亡命した中国の高官貴族であり、幽州刺史などを歴任して七十七歳でこの世を去った鎮なる人物であるが、墓誌には「釈迦文仏弟子□□氏鎮」とあり、在家の仏教信者であったことが分かる。釈迦を「釈迦文仏」と書いているのは、「弥勒下生経」に基づく表記の可能性

が指摘される。⁽³⁰⁾この経典は『増一阿含経』巻四四の一部から生まれた別生経で、三八四年から翌年にかけて訳出され、三九六年に曇始が高句麗に伝えたことされる。仏教受容の初期に中国の弥勒信仰の影響が及んでいたものと理解される。

弥勒の尊名を銘文に刻んだ遺物としては、永康七年銘金銅光背がある。この光背は一九四七年に平壤市平川里で出土した。

永康七年は陽原王七年(五五一年)に比定される。その銘文には、

永康七年歲次□□、為亡母造弥勒尊像、祈福願令亡者神昇
覺岸□、慈氏三會之勅悟、无生念究竟必果菩提、若有罪、

右願一時消滅随喜者等同此願

とあり、⁽³¹⁾亡き母が「慈氏」(弥勒)の龍華三會の初会の説法に遇することを願い、弥勒の尊像を造ったことが刻されている。

平川里では一九四〇年に金銅造半跏思惟像が発見されている。

光背がこの金銅仏に付属するものであったとすれば、半跏思惟像は弥勒菩薩を表している。

ついで、辛卯年銘金銅三尊仏の光背銘を挙げる。一九三〇年に黄海北道谷山面花村面蓮山里で出土したとされる一光三尊形式の小金銅仏であり、施無畏与願印の無量寿仏(阿弥陀仏)立像を中尊とし、光背は左右下部に二軀の脇侍菩薩立像、上部に三軀の化仏を配置して一鑄し、中尊と光背を柄止めする。光背

裏面に刻まれた銘文には、

景四年在辛卯比丘道須、共諸善知識那婁・賤奴・阿王・阿
 堀五人、共造无量寿像一軀、願亡師・父母、生生心中常值
 諸仏、善知識等值遇弥勒。所願如是、願共生一処、見仏聞法
 とみえる。「所願如是」までを七行で刻み、書き切れなかった「願
 共生」以下を光背下部の余白に刻む。出土地点や像容から高句
 麗の仏像と考えられるが、「景四年」という一字で表記される
 年号は見当たらない。辛卯年は平原王十三年（五七一）にあ
 るとみられる。

銘文は、師・父母が来世で諸仏に会い、造像に関わった善知
 識らも弥勒に値遇せんことを願って无量寿仏一軀を造つたこと
 を記したもので、死者の供養とともに、下生した弥勒の龍華三
 会によって自らの救済を期す。阿弥陀浄土に対する信仰と弥勒
 下生の信仰の結合が看取される。

これに対して、兜率天への往生を期すのは、一九八八年に咸
 鏡南道新浦市の梧梅里³² (寺谷遺跡) で出土した金銅板銘
 である。遺跡は青海土城の南西一〇キロメートルの地点に位置
 し、高句麗・渤海両時代の文化層を包含する建物址である。金
 銅板は後者の文化層から出土している。³³ 建物・塔の廃絶にとも
 ない金銅板も廃棄されたとみられる。銘文は十三行からなり

一三文字が判読されている。内容としては造塔誌にあたり、
 その中段には、

奉為円覚大王謹造茲塔、表刻五層相輪、相副願主、神昇兜
 率、查勤弥勒、天孫俱会、四生蒙慶

とみえる。「天孫俱会」とは仏や菩薩に出会うこと意味し、直
 前にある兜率天への往生を欣求した用句と考えられる。造塔に
 は、願主は兜率に昇り弥勒に勤めることができ、天孫俱会して
 四生は慶を蒙るといふ願いが込められている。造塔の時期は、
 銘文の最後に「□和三年歲次丙寅二月廿六日□戊朔」と記され
 ている。年号を「太和」、丙寅年を陽原王二年（五四六）にあ
 てる見解があるものの慎重を要する。年号と干支の組み合わせ
 や遺跡の性格、弥勒信仰の盛行から高句麗時代の造塔とみてよ
 いと思われるが、その時期を判断する材料に乏しい。

(三) 新羅

六世紀前半の法興王の時代にはじまる新羅の仏教において弥
 勒信仰は独自の発展を遂げた。『三国遺事』巻第三・興法・弥
 勒仙花末尸郎真慈師条には、興輪寺の僧真慈が弥勒尊像の前で、
 花郎に化身して現世に姿を現した弥勒に仕えたいと日頃から誓
 願していたところ、靈妙寺の路傍の樹下で小郎子に化身した弥

勒菩薩（弥勒仙花）に遇ったという説話がみえる。仙花は花郎の別称であり、新羅の青年男子で構成される花郎集團の統率者にして、下生した弥勒の化身と信じられていた。³⁶⁾ 弥勒への信仰が集團の精神的支柱を形成していた。こうした花郎の活動とも関連して、新羅の王都慶州には信仰の形跡が残されている。

弥勒像と分かる確実なものは、七世紀前半の作例とされる断石山神仙寺磨崖仏像群（慶尚北道慶州市乾河邑松仙里断石山）である。この磨崖仏群は、断石山中腹のコの字形をなす四つの巨石の内壁面に大小一〇軀の仏菩薩・人物が彫られる。巨石は約一八メートル×三メートルの石室を形成し、周辺で出土した瓦片から、瓦葺きの屋蓋があったと推測されている。石室は前室・後室に分かれる。後室を構成する北側の岩に巨大な如来（高さ八・二メートル）が彫られており、東側・南側の岩に菩薩立像が彫られている。南側の岩面には造像銘記が刻まれており、判読は難しいが、一五行目から次行にかけて、

於山巖下、創造伽藍。因靈虛、名神仙寺、作弥勒石像一区
高三丈、菩薩二軀（下略）

とあり、弥勒石像を主尊とする神仙寺が建立されたことが分かる。これにより、如来像は下生して衆生を救済する弥勒の姿を表していることも判明する。

その前室には、上段に半跏思惟像、および後室を指さす如来立像二軀、菩薩立像一軀、さらに下段に室の方を向いた俗体の男子立像二軀を刻出する。半跏思惟像を弥勒菩薩と考えるならば、菩薩像は弥勒の下生を待つ姿、俗人像は説法を行う後室の弥勒如来のもとへと参拝者を誘う者たちの姿である。ここに表現されるのは、発願者による兜率天往生への願いではなく、悟りを得るための兜率天で修行する弥勒菩薩への期待であって、神仙寺の石室空間は弥勒下生信仰に基づいて構成されたことが分かる。³⁷⁾

八世紀中葉にかかる説話として、弥勒・阿弥陀二尊を安置する白月山南寺の縁起を伝える『三国遺事』巻第三・塔像第四、南白月二聖努勝夫得・怛怛朴朴条がある。弥勒に欣求し白月山で修行に励んでいた努勝夫得が、観音菩薩の化身とともに沐浴したことで弥勒の尊像に生まれ変わり、夫得とともに極楽往生を願い修行中であつた怛怛朴朴も、その姿をみて大願成就を願い、同じように沐浴したところ、無量寿仏に化生したという話であり、広徳二年甲辰（七四六）創建の白月山南寺は、金堂に弥勒塑像、講堂に無量寿像（阿弥陀像）を安置し、各々「現身成道弥勒之殿」「現身成道無量寿殿」の扁額を掛けていたという。弥勒像になった夫得の化生に主体が置かれ、阿弥陀への化生

に優先されるが、弥勒・阿弥陀の二尊を並置する点では辛卯年銘金堂三尊仏光背、蓮華寺戊寅年銘仏碑像に共通する。これに類するのは、甘山寺の石像弥勒菩薩立像・石像阿弥陀仏立像である。弥勒菩薩立像の光背に刻まれた造像記は、「開元七年己未（七一九年）に重阿湊金志誠が亡父金仁章、亡母親肖里のために造立したことを記し、「国主大王」や近親者、一切衆生に仏の功德が及ぶことを願う内容である。阿弥陀仏立像の造像記もほぼ同じで、亡くなった近親者が彼岸に昇ることを祈願する。³⁸⁾

このほか、死者の追善供養のために弥勒の尊像を制作した例がある。三花嶺の弥勒如来倚像を主尊とする石造三尊仏がそれにあたる。この弥勒倚像は、『三国遺事』巻第三・塔像第四・生義寺石弥勒条にみえる石弥勒に擬せられる。この説話によれば、石弥勒は生義なる僧が南山の南洞で土中より掘り出し、三花嶺の頂に安置したという。この三尊仏に関しては、黄壽永氏の詳密な研究³⁹⁾がある。氏によれば、三尊仏は本来石龕に奉安され、同時期に築造されたと推定される古墳に南面していたとみられ、被葬者の追善のために安置された仏像であったという。

説話的であるが、墓前に弥勒を安置した例として、『三国遺事』巻第二・紀異第二・孝昭王代竹旨郎条に、朔州都督使の述宗公が竹嶺で遇った居士を弔うべく北峯に埋葬させ、石弥勒を墓前

に安置させたことがみえる。居士の生まれ変わりが述宗の子であり、三国一統のために金庾信のもとで活躍した竹旨郎であったという。この話は、『弥勒下生経』が説く翅頭末城の大婆羅門主妙梵の妻摩波提に托生して下生した弥勒が、国土を教化した話に基づく⁴⁰⁾とされる。また、同書巻第三・塔像第四・洛山二大観音正趣調信条は、観音菩薩を信仰した調信が蟹岬嶺に埋葬した子どもの墓を掘り返すと石弥勒が埋まっていたことから私財を喜捨して浄土寺を建てた話を伝える。

小結

ここまで俯瞰してきたように、朝鮮三国には弥勒の姿を半跏思惟像で表現する例を造像記によって確認できる。また、弥勒の尊像は現世に生きる発願者自身や結縁者のために制作される場合や、死者の供養を目的に造られる場合があった。前者は三会遇を願い、後者は浄土への往生を願うものである。一般的に弥勒浄土は兜率天であるが、竹旨郎の転生譚、調信の浄土寺建立譚にみる浄土は、弥勒の下生によって出現した現世の浄土であり、ともに下生信仰に関わる内容といえる。

これに対して、弥勒上生信仰に依拠して兜率天への上生を

願った例として、新浦市梧梅里³¹출토의金銅板銘をみた。兜率天で修行する弥勒に対する信仰があったことは、断石山神仙寺磨崖仏群の半跏思惟像からも推量される。ただし、造像銘を持たない半跏思惟像が弥勒であるか否か、かりに弥勒であるとして兜率天上の弥勒なのか、下生した弥勒なのかは必ずしも判然としない。

弥勒と阿弥陀をあわせて信仰の対象とした例が複数あることも確認した。この背景には弥勒浄土・阿弥陀浄土に対する認識や当時の往生観があったとみられる。⁴¹二つの浄土に対する認識が未分化であったとする見方もできるが、辛卯年銘金銅三尊仏光背銘においては、死者のために無量寿仏をつくり、その功德によって現世に生きる善知識らの弥勒値遇を願っているのである。死者・生者の往くべき浄土は明確に区別されている。

おわりに

以上、大掴みではあるが、『日本書紀』敏達紀にみえる弥勒石像を糸口にして古代朝鮮の弥勒信仰を示す金石文・説話資料を検討してきた。平安時代以降の記録にみえる弥勒の石像が百濟より将来されたものであるとすれば、その像容は半跏思惟像

と推定される。また、弥勒・阿弥陀の尊像を一对のものとして信仰する例をふまえて理解するならば、佐伯連による仏像将来を併記するのは、蘇我馬子が弥勒菩薩を単独ではなく、阿弥陀仏ならずとも二つの仏像あわせて所有し、信仰したことに意味をもたせようとしたのではないかと考えられる。

しかし、百濟の弥勒菩薩、半跏思惟像に対する信仰の様相は不明な点も多い。高句麗・新羅の例をみても、蘇我馬子の長命祈願や野中寺金銅造半跏思惟像銘文みられる現世利益的な傾向を見出せない。弥勒寺西塔の舍利奉安記と敏達紀の類縁性に言及したが、敏達紀が百濟の弥勒・舍利信仰の影響を受けて叙述され可能性は十分にある。この点も含め、古代日本・朝鮮の弥勒信仰の多様な展開を理解するためには、経典理解や図像表現におけるインド・中国仏教の影響、俗信との習合など複数の視点から総合的に研究するとともに、小稿で取り上げたものをはじめ、個々の史資料に対する詳細な検討が必要である。

注

(1) 寺西貞弘「仏教伝来と渡来人」(『古代史の研究』第二〇号、二〇一七年)。「扶桑略記」欽明天皇十三年条は、継体天皇十六年(五二二)に

- 来倭した司馬達等が大和国高市郡に草堂を営んだことをはじめ、公伝以前の仏教の受容を伝える。
- (2) 近年の批判として、水野さや『図説韓国の国宝』（河出書房新社、二〇一一年）、磯波恵昭『日本古代の菩薩半跏思惟像をめぐる考察』（加須屋誠編『図像解釈学・権力と他者』竹林舎、二〇一三年）がある。また、中村元・久野健監修『仏教美術事典』（東京書籍、二〇〇二年）所載「半跏思惟像」（石井日奈子執筆）など。
- (3) 例えば、推古天皇十一年（六〇三）十一月己亥朔条には、秦河勝が皇太子厩戸の所有する「仏像」を譲り受け、蜂岡寺（広隆寺）を創建したとあり、同天皇三十一年（六二三）七月条には、来倭した新羅使の智洗爾が献じた「仏像一具」を葛野の秦寺に置いたとある。これら二軀仏像は、『広隆寺資財交替美録帳』（八九〇年）に記載される二軀の「金色弥勒菩薩」に該当し、同寺が所有する二軀の半跏思惟像（宝冠弥勒・宝髻弥勒）に比定される（広隆寺の半跏思惟像については、林南壽『廣隆寺史の研究』中央公論美術出版、二〇〇三年）。しかし、弥勒とするのは九世紀末葉の記録であり、秦河勝が入手した当時の尊名は、『日本書紀』にも記されず明らかではない。
- (4) 藤沢一夫「鹿深臣百濟将来弥勒石像説」（『史迹と美術』一七七号、一九四七年）、日野昭「敏達紀の弥勒石像とその周辺」（『日野昭論文集Ⅰ日本書紀と古代の仏教』和泉書院、二〇一五年）。
- (5) 弥勒信仰に関しては、松本文三郎氏の『弥勒浄土論』（初出は丙午出版社、一九二一年）をはじめとする研究がある。ここでは、速水侑「弥勒の救い」（『弥勒信仰—もう一つの浄土信仰—』評論社、一九八〇年）に拠って整理する。
- (6) 速水侑「律令社会における弥勒信仰の受容」（『南都仏教』第一〇号、一九六一年）。
- (7) 津田左右吉『日本古典研究』下（岩波書店、一九五〇年）。
- (8) 吉田一彦「日本書紀」仏教伝来記事と末法思想」（『仏教伝来の研究』吉川弘文館、二〇一二年）。
- (9) 日野昭前掲注4論文。
- (10) 佐伯有清編『日本古代氏族事典』（雄山閣、一九九四年）。星野良史氏執筆の「甲賀氏」の項目参照。
- (11) 日野昭前掲注4論文。
- (12) 日野昭「佐伯連の仏教受容」（『日野昭論文集Ⅰ日本書紀と古代の仏教』和泉書院、二〇一五年）。佐伯連については『新撰姓氏録』左京神別、『職員令集解』左衛七府条所引官符（大伴宿禰真木麻呂・佐伯宿禰金山等解）などにより、大伴氏から分かれて氏族を形成したことが知られる。
- (13) 『日本書紀』欽明天皇十五年五月戊子条。
- (14) 『三國史記』卷二十六・百濟本紀第五・聖王三十二年秋七月条。
- (15) 『日本書紀』敏達天皇六年十一月朔条。
- (16) 藤岡穰「野中寺弥勒菩薩像について—螢光X線分析調査を踏まえて—」（『MUSEUM』六四九号、二〇一四年）。後世に刻まれた可能性も指摘されるが、藤岡氏の研究に拠って造像から程なく刻まれたものとみとおく。
- (17) 奈良文化財研究所飛鳥資料館編『飛鳥・白鳳の在銘金銅仏』（一九七六年）参照。東野治之氏によれば、「丙寅年四月大田八月癸卯開記」の「開」は暦の用語で、造営や治病によいと日とされる（同書「各個解説」七九頁）。
- (18) 藤沢一夫前掲注4論文。
- (19) 田村圓澄氏も弥勒石像が滑石製の半跏思惟像であった可能性を認めている（同「半跏像と弥勒信仰」（『古代朝鮮仏教と日本仏教』吉川弘文館、一九八〇年）。
- (20) 大西修也「百濟半跏像の系譜」（『日韓古代彫刻論』中国書店、二〇〇二

- 年。
- (21) 田村圓澄前掲論文注19は、百濟では悉達太子像と弥勒像がともに半跏像で造られることがあったとする。
- (22) 水野さや『韓国仏像史—三国時代から朝鮮王朝まで—』(名古屋大学出版会、二〇一六年)による。
- (23) 毛利久『仏教東漸』(法蔵館、一九八三年)。
- (24) 朱秀浣氏の説。以下の論文で鏡山智子が紹介している。同「半跏思惟像と弥勒信仰に関する研究—朝鮮三国時代の磨崖仏を中心に—」(『鹿島美術財団年報』第三四号、二〇一六年)。朱秀浣氏の研究は、「断石山神仏寺磨崖仏の図像学的再考—授記三尊としての解釈試考—」(『東洋美術史学会国際學術大会口頭発表』、二〇一五年一月)。
- (25) 黄壽永「忠清南道燕岐石像調査」(『韓国仏像の研究』同朋舎、一九七八年)。
- (26) 中田功「造像銘記鈔存」(『新羅・高麗の仏像』二玄社、一九七一年)、齋藤忠『古代朝鮮・日本金石文資料集成』(吉川弘文館、一九八三年)、橋本繁『古代朝鮮諸国の石碑・石刻』(小倉慈司・三上喜孝編『古代日本と朝鮮の石碑文化』朝倉書店、二〇一八年)など。「弥」と判読するのは、黄壽永編『韓国金石遺文』(一志社、一九七六年)をはじめ韓国の研究者である。
- (27) 崔鉉植「鄭淳一訳」弥勒寺創建の歴史的背景」(新川登龜男編『仏教』文明の東方移動—百濟弥勒寺西塔の舍利莊嚴—)汲古書院、二〇一三年。
- (28) 崔鉉植注27論文を参考に私見によって一部表現を変更した。
- (29) 齋藤忠「私を見た高句麗古墳壁画」(『高句麗壁画古墳』共同通信社、二〇〇五年)。壁画古墳には、蓮華文や飛天文、光明を放つ菩薩とみられる図像が描かれた。平壤市郊外では上古里廢寺跡、定陵寺跡、金剛寺跡などの寺院跡が確認されているが、広開土王の時代にすでに平壤に九寺が建立され、仏教信仰が盛んであった。
- (30) 田村圓澄「弥勒信仰と二つの弥勒像」(『古代朝鮮仏教と日本仏教』吉川弘文館、一九七〇年)。
- (31) 国史編纂委員会編『韓国古代金石文資料集1』(高句麗・百濟・楽浪篇、一九九五年)所載の徐永大氏の釈文による(原載は『訳註韓国古代金石文』巻一、韓国古代社会研究所、一九九二年)。
- (32) 李宇泰編著『韓国金石文集成』(2)「高句麗2、高句麗及び高句麗関係金石文」(解説篇)(韓国国学新興院、二〇一四年)による。
- (33) 李宇泰編著注32書解説。
- (34) 韓国国立文化財研究所、韓国金石文映像情報システム(gsmn.pic.go.kr)所載の解説文による。
- (35) 金正淑「高句麗銘文人金銅板の紹介」(『韓国古代史研究会会報』第二三号、一九九一年)。
- (36) 村上四男撰『三国遺事考証』下之一(槁書房、一九九四年)同条解説。三品彰英「新羅花郎の研究」(三品彰英論文集第六卷、平凡社、一九七四年)。
- (37) 鏡山智子氏は、如来坐像・半跏思惟像を中心に構成される例として三国時代末の制作と推定される邑内洞磨崖仏(大邱市北区)の図像を挙げ、『上生経』『下生経』双方が関わる可能性を指摘する。同氏前掲注24論文。
- (38) 二つの造像記の内容を記す『三国遺事』巻第三・造像第四・南月山条によれば、弥勒は金堂の主尊として奉安されていた。
- (39) 黄壽永「新羅南山三花嶺弥勒世尊」(前掲注25書)、田村圓澄「新羅の弥勒信仰」(田村圓澄・秦弘燮編『新羅と日本古代古文化』吉川弘文館、一九八一年)。
- (40) 三品彰英遺撰『三国遺事考証』中(槁書房、一九七九年)同条解説。大西修也「阿弥陀・弥勒信仰の実態と図像」(町田甲一先生古稀記念

会編『論集仏教美術史』吉川弘文館、一九八六年所収。

(42) 金永晃「弥勒仏信仰と仏像―韓国古代弥勒信仰を中心に―」(『仏教文化学会紀要』第一六号、二〇〇八年)。

〔付記〕本稿は科学研究費補助金19K00999による研究成果の一部である。